

それまでタイガーの手回し計算機で、一時間以上かけて七元連立一次方程式を解いていた青年は、最新鋭機「IBM7090」のスピードに圧倒された。手回し計算機がカタツムリだとすれば、電子計算機はジェット機よりも速かった。

しかし、一万変数の連立一次方程式を解きたいと考えている人たちにとって、この時代の計算機はまだスピードが遅く、データを格納するためのメモリー容量も小さかった。

計算機にかかわる学問は、このあと急速な立ち上がりを見せ、七〇年代に入ると、京都大学と大阪大学に情報工学科、東京工業大学に情報科学科、電気通信大学に計算機科学科、そして金沢工業大学に情報処理工学科が設立された。

これらの学科の守備範囲は、設立母体になった学科（電気工学科、機械工学科、応用物理学科、数学科など）によって異なっていたが、その内容を大まかに分類すると、計算機本体を扱う「ハードウェア研究」、計算機を効率良く動かすための「ソフトウェア研究」、計算機を利用して現実問題を解くことを目的とする「アプリケーション（応用）研究」、そして数学や論理学などの「計算機科学基礎研究」からなっていた。

六〇年代半ば、人々は計算機のスピードが一〇〇万倍速くなれば、ほとんどの問題は解決されると考えていた。効率的なプログラムを書けば、計算は五倍速くなるかもしれない。しかし計算機が一〇〇〇倍速くなれば、そのような工夫をしなくても問題は解けるというわけである。

ところが、七〇年代に入って計算スピードが向上し、メモリーも安くなると、易しい問題はあらかた解けてしまい、研究者の関心はより難しい問題に移った。

易しい問題は、稚拙なプログラムでも解ける。しかし、より大型の難しい応用問題を解くには、アルゴリズム（計算方法）とソフトウェアの善し悪しが勝負になってくる。

こんなところに見つかったのが、計算機がどれほど速くなっても、うまく解けそうもない「NP 困難問題」である。計算機科学の世界にブラック・ホールが出現したのである。説明しなくてはならない。

計算機科学者の中で「うまく解ける」問題とは、問題の規模が一〇倍になっても、一〇〇倍ないし一〇〇〇倍程度の時間をかければ解ける問題のことをいう。このような問題は、規模が一〇〇倍になれば計算量は一万倍以上になるが、計算機が一〇万倍速くなれば、たちどころに解ける。

ところが、ごく当たり前の問題の中に、問題の規模が一〇倍になると、どのように工夫しても、 2^{10} 倍＝一〇〇〇倍の計算量が必要になると思われる、厄介な問題が存在することが明らかになったのである。

規模が一〇〇倍なら計算量は 2^{100} 倍、すなわち 10^{30} 倍になる。計算機が一〇〇万 (10^6) 倍速くなっても、このような問題を普通のやり方で解こうとすると何兆年もかかる。しかも世の中は、このような「うまく解けない問題」、すなわち「NP 困難問題」が溢れているというのである。

この結果、わが国でも七〇年代に入ると、難しい問題を解くためのアルゴリズムや、ソフトウェア研究の重要性が認識されるようになった。京都大学、大阪大学、東京工業大学などの有

力大学に、情報科学科・情報工学科・計算機科学科が出来たのはこの頃である。

しかしどの大学も、その規模は一学科分（教官定員一五人、学生定員四〇人程度）で、米国の有力大学に匹敵する「ソフトウェア中心の、計算機科学科は、どこにもなかった。政府・産業界・学界は、依然としてソフトウェアを軽視していたのである。

「もしジョージ・フォーサイスのような優れたリーダーのもとで、全国から優秀な研究者を集めれば、スタンフォードと並ぶ、計算機科学の世界的拠点が出来るともかもしれない」。こう考えた三三歳のヒラノ青年は、**陸の孤島に馳せ参じた。**

西村教授から、大学設置審議会で助教授人事がパスしたという知らせがあったのは、一月半ばである。お礼の言葉を述べたあと、研究所との交渉が済むまで、「**割愛願**い」の発送を待つて頂くようお願いした。

割愛願いというのは、研究者を外部から招聴する際に、学長から相手側の組織の長に対して、移籍の承諾を得るために発行する公文書である。

・・・

電力中央研究所理事長

松永安左エ門殿

このたび貴研究所の今野浩氏を、昭和四九年四月一六日付けで本学助教授として採用することになりましたので、曲げて同氏の割愛をご承認下さいますようお願いいたします。

筑波大学学長 宮島龍興

懲戒免職か

人事が通った以上は、なるべく早く根回しを始めなくてはならない。まずは直属の上司である小島氏だが、この人はおそらくノーとは言わないだろう。アメリカ帰りの Ph. D. を持て余していたし、戦力になりそうもない男がやめたところで、別に困ることはないからである。

翌朝ヒラノ青年は、小島氏に話を切り出した。

「昨年暮れに、筑波大学から来てもらえないかという話がありました。もっと早くご相談しなくてはいけないと思っていましたが、昨日人事が通ったという知らせがありました。これまで大変お世話になっておきながら、こんなことになって申し訳ありませんが、一番先にお知らせしようと思った次第です」

小島氏は驚いた様子だったが、ヒラノ青年の表情を見て、慰留しても無駄だと思ったようだ。

「いずれこういうことになるとは思っていたが、ちょっと早すぎるな。実は、君の留学期間延長が問題になった時、スタンフォードで **ph.D.** を取ってくれば、すぐにどこかに引き抜かれてしまうから、やめた方がいいと言ったんだよ。だから、これは起こるべくして起こったことだと思うが、所長や専務理事の了解を得るのは難しいだろう。説得してはみるが、困ったこ

とになったな」

二一世紀に入って、日本の大学でも助手を「助教（アシスタント・プロフェッサー）」、助教授を「准教授（アソシエイト・プロフェッサー）」と名称変更したが、筑波大学は三〇年以上前に、この制度を採用していたのである。

本家三銃士と筑波三銃士との違いは、熱血漢はアトス（ヒラノ青年）ではなくポルトス（宇治橋）であること、アラミス（西藤）が長身ではないこと、そしてポルトスが酒を飲まないことくらいである。

- ・文部省からの天下りで計算機センター長（キャリアでもない）
- ・学群によるポスト争い

あとがき

二〇〇一年三月、一九年間勤めた東京工業大学を停年退職するにあたって、書類棚を整理していたところ、「情報学類」というラベルが貼られた四冊のファイルが出てきた。筑波大学時代の学科会議の資料や個人的メモの類である。

いまさら、このようなもの保存していても仕方が無いと思ったが、とりあえず新しい勤務先に運びこんだ。そしてその数ヶ月後、ファイルを開けて何枚かのメモに目を通した時、長い間封印してきた苦い記憶が蘇ってきた。

ヒラノ教授はその後三ヶ月ほどかけて、この本の第一稿を書きあげ、筑波大学に勤める友人に送り届けた。

領土略奪事件の真相を初めて知ったこの人は、「あまりにもショッキングなので、自分の息子がこの大学の計算機学科に在籍している間は、公表を差し控えてほしい」という趣旨の手紙を送ってよこした。大切な友人の親子関係を壊してはいけないと思ったヒラノ教授は、この原稿を「神棚ファイル」にしまった。

それから一〇年、二度目の定年退職後、「工学部の語り部」に転進したヒラノ教授は、三七年にわたる大学生活で経験した「最大の事件」を書き残す価値があると考え、原稿を読み直してみた。そして、友人の頼みを聞き入れたのは正解だったと思った。なぜなら、そこには我ながら驚くような「怨念」が立ちこめていたからである。

この本は、第一稿から怨念を取り除いた、「敗者の記録」である。どの戦争でもそうであるように、敗者の論理があれば勝者の論理もあるはずだ。それについては、松本教授らの言動を通じてかなり正確に把握しているつもりだが、敗者の一方的思い込みの部分があるかもしれな

い。

その後、この原稿の一部を、『工学部ヒラノ教授の事件ファイル』（新潮社、二〇一二）で取り上げたところ、青土社の菱沼達也氏の目にとまり、このたびそのフルバージョンを上梓することになった。

その後、菱沼氏と協議を重ねた結果、“ヒラノ教授”の名付け親である新潮社の足立真穂氏の了解を得た上で、『工学部ヒラノ教授』（新潮社、二〇一一）、『工学部とヒラノ教授の事件ファイル』（新潮社、二〇一二）、『工学部ヒラノ教授と4人の秘書たち』（技術評論社、二〇一二）に続く、ヒラノ教授シリーズの一卷として位置づけることにした次第である。

国が新構想大学の設置を決めた時、候補地に挙げたのは、筑波、木更津、浜松の三か所だったという。しかしどこであっても、陸の孤島度に大きな違いはなかっただろう。

国際A級の計算機科学科を作るのであれば、陸の孤島ではなく、既存の大学のどこか、たとえば筑波より一年あとの一九七八年に、(ソフトウェア中心の)計算機科学科を作った東京農工大学に、三四人の人員を配置すればよかったのだ。

この時代であれば、また東京の小金井であれば、筑波のような無残な結果にはならずに済んだのではなかろうか。

研究学園都市の独立研究法人に息子が勤めている関係で、ヒラノ名誉教授は時折筑波を訪れる。かつては、東京から二時間以上かかった筑波大学は、“つくばエクスプレス”のおかげで、一時間余りで行けるようになった。

三〇年前にはひよろひよろだった並木が大木に育ち、見事な蔦が這う建物の脇をドライブすると、ボールダーにあるコロラド大学が思い出される。日本としては珍しく広大なキャンパスは、国際A級大学の雰囲気漂わせている。